第30回
全国読書作文コンクール
優秀作品集

小学生5点・中学生4点

公益社団法人全国学習塾協会

令和二年度　第三十回　全国読書作文コンクール

小学生の部・大賞

一つのくふうで

遠山　紘史（小三）

「きゅう食にチョコレート？」

ぼくはひょう紙の絵を見てこう思いました。チョコレートのほかにもいちごやチーズやパンがあってとてもおいしそうです。ぼくはきゅう食が大すきです。コロナ感せんしょうで学校が長い間、休みになったのできゅう食を食べられなくてざんねんでした。この前からはじまってうれしかったです。この本を読んでいくと、トリンもきゅう食がすきなところは、ぼくと一しょだなと思いました。

ふ思ぎに思ったこととすごいなと思ったことがあります。ふ思ぎに思ったことは、トニーがトリンにきゅう食をくばる時に、トリンが

「ニンジンはきらいだよ。」

と言わなかったことです。ぼくの学校は、にが手なものはへらすことができます。

「ニンジンをへらしてください。」

とトリンも言えたらよかったです。本当のことを言えなかった理由は、ウサギはニンジンがきらいと言うのははずかしいことだとトリンが思ったからだと思います。なんだかトリンがかわいそうな気がしました。きらいなものをきちんと言えるようになるとよいなと思います。

すごいなと思ったことは、ミアのじゅもんでトリンがニンジンを食べることができたことです。ミアのじゅもんは、くふうです。ぼくはミアのじゅもんみたいに同じようなことをしたことがあります。ぼくは、二年生のときに一人で電車にのるのがこわかったです。おばあちゃんの家からぼくの家まで電車にのるのに、間ちがえたらどうしようと思ったからです。その時に、おばあちゃんが通かする駅を一つ一つ教えてくれました。ぼくは駅名をノートに書きました。そのノートを持って電車にのると、こわくなくなりました。次はどこの駅だとか、この電車はあっているとか、とても心強かったです。一つのくふうでにが手のものがクリアできました。もしもぼくの友だちが電車にのるのがにが手だったら、ぼくのくふうを教えてあげたいです。

これからもにが手なものが出てくるかもしれません。その時は色いろなくふうを考えようと思いました。にが手なものがクリアできたらトリンみたいにとてもうれしいから。

対象図書名　ウサギのトリン

小学生低学年の部・最優秀賞（小三）

幸せは自分の心でつかむもの

菊田　智佳

この本を読むまでは、目が見えない人や耳が聞こえない人のことは知っていたけれど、手や足がない人のことは知らなかった。あみちゃんのような体の人が自分のことをどう思っているのか知りたいと思って、この本を読みはじめた。

本を読んでいくと、手のかわりに足の三本の指でおはしをもったり、折り紙をしたり、おしりで走ったり、あみちゃんはいろいろなことができるということが分かった。それは全部あみちゃんがたくさんど力して、できるようになったことだと思う。

一番心に残ったことは、あみちゃんが高校に行きたくないと言って部屋にとじこもったときに、お母さんがおこって学校の道具や教か書をゴミぶくろに全部入れたというところだ。なぜかというと、あみちゃんがお母さんにすなおに「ごめんなさい」と言えて、ひとりで苦しんでいたあみちゃんが「あみはあみらしく」というお母さんの一言で助けられたからだ。わたしは、自分にすなおになって「ごめんなさい」と言うことは、とてもゆう気がいることだと思う。「自分らしく生きること」はとてもむずかしい。そしてトイレのこととか、自分でできないことを人にたよることはもっとゆう気がいることだ。

わたしの学校には「あおやま」と「すなこだ」というとくべつなクラスがある。そこには、小さい音が耳にひびいてしまい気になる子や、イスにすわれずに教室のすみにずっとすわっていないと、おちつかない子など、色々なこせいをもっている子がいる。その中にゆきちゃんと言う友だちがいる。ゆきちゃんは、学校の正門の前でいつも立ち止まっていて、早く来たのにいつもちこくをしてしまっていた。ゆきちゃんを見ていて自分にできることはないかなと思っていたある日、ゆうきを出して「ゆきちゃんいっしょに行こう」と言ったら、ゆきちゃんが手を出してくれて、いっしょに教室に行けた。それからも時々声をかけるようにしている。あの時声をかけなかったら、きっといつまでももやもやしていただろう。一年たった時にゆきちゃんが「いつもありがとう。お母さんがいなくてさびしかったんだ。」と言ってくれてゆきちゃんの本当の気もちが分かってうれしなみだが出た。

自分のど力でいろいろなことをのりこえたあみちゃんの生き方をすごいと思う。自分らしく生きることや、自分にすなおになって人にたよるゆう気を持つ事が大切だということが、今からの私の力になるだろう。あみちゃんが学んだことが、ま法の言葉を生み出している。会ったことはないけれど、目の前にいるあみちゃんが、やさしいえ顔でせ中をおしてくれた気がした。これからは、自分をしんじて、自分の心を大切にして、幸せを見つけられる生き方をしたい。

対象図書名　あみちゃんの魔法のことば

小学生の部・最優秀賞（小四）

あみちゃんへ

東　結夢

あみちゃんってすごいね。手足がほとんどないのに堂々とみんなの前で笑顔でいられている。もし私が同じ状態にあったら、笑顔どころか人前にも出ることが出来ないかもしれない。それは私の心の中に、人と見た目が大きく違うことを恥ずかしいと思う心があるからかもしれない。「あみちゃんの魔法のことば」を読んで、あみちゃんのとても前向きで諦めない強い心に惹かれました。

あみちゃんには手足がほとんどない。だけど、左足で箸を持ったり、お尻で走ることだってできる。それは手足のある私にとってはごく普通の日常だけど、あみちゃんはその日常を過ごすために、きっと私には想像もつかない程の努力をしてきたんだと思う。それでも出来ることには限りがある。その出来ないことも仲間に手伝ってもらいながら、あみちゃんは何でも乗り越えてきたんだね。それはあみちゃんが自分に素直で、人に頼る勇気を持つ大切さを知っていたからだと思う。

私は少し目が悪い。だから先日教室で席を一番前に替えてもらったんだ。私とあみちゃんは出来ない事は違うけど、生活していく中で仲間に助けられてることは同じだね。

私は、最初、自分以外にも前の席にしてほしいと思っている子がいるのを知っていたので、自分が席を替えてほしいと言ったら先生や友達が困るだろうと考えた。だから、なかなか言い出せずにいたんだ。でも、勇気を出して頼んだら、案外すぐに席を替わってもらうことが出来たんだ。人に頼むことは恥ずかしいことではないし、友達だからこそ頼っても良いんじゃないかと思ったよ。もちろんそれを当然と思わず感謝することを忘れたらいけない。自分も助けてもらった分、友達が困っていたら助けてあげたいなって思った。

今、私の近くにあみちゃんがいたなら、私は出来る限りあみちゃんの出来ない事を手伝ってあげたいと素直に思う。だけど、私が落ち込んでいたら、その時はあみちゃんの得意な笑顔で励ましてもらいたい。お互いに出来ることも出来ないこともあるけれど、私もあみちゃんも同じ人間。出来ない事を補い合っていけたら良いと思う。時にはそれが苦痛に感じることもあるかもしれないけど、その人の持つ障害をその人の個性として認められて助け合っていける社会になったら良いのにな。

私の夢は病院で働くことだけど、これから先、あみちゃんのように大きな障害を持つ子に会うこともあると思うし、自分がつまずくこともあると思う。そんな時は、あみちゃんに教わった前向きに諦めずチャレンジしていく心を思い出そうと思う。

自分から出来ることを何でもチャレンジする。それがあみちゃんなんだよね。

対象図書名　あみちゃんの魔法のことば

小学生の部・最優秀賞（小五）

『飢餓』と『飽食』

小池　成海

「食べ物を残さないで、ちゃんと食べなさい。もったいないでしょ。」とぼくはよくお母さんにおこられます。ぼくは、好ききらいが多くて、好きなものはたくさん食べられるけどきらいなものは食べると気持ち悪くなって食べられなくなって残してしまいます。

この本を読んで、『飢餓』と『飽食』という言葉を知りました。これは、世界の食料問題の大切な点を一言で表現している言葉だそうです。国語辞典を引いてみると、「飢餓」とは「食べ物がなくて腹がへること。飢え」つまり満足に食べられない状態のことで、逆に「飽食」とは「あきるほど腹いっぱいに食べること。食べたいだけ食べられて、食物に不自由しないこと。」と書いてあります。

世界には、日本のように食品ロスが問題になるような飽食の国と飢餓に苦しむ人々が暮らす地域に別れています。経済の発展が進まないで、所得が低い状態からぬけ出せない発展と上国が飢餓の地域です。アフリカや東アジアや南アジアに栄養不足の人々が多いようです。

この資料を読んで思い出したことがあります。ぼくが二年前にフィリピンのセブ島に行った時のことです。空港からホテルに向かうと中の車から見た景色です。でこぼこで水たまりがたくさんある道を車やバイクがたくさん走っていて、道のわきには、はだしで歩いていたりボーッと座ったりしている人がたくさんいました。ボロボロの家がたくさんあって、魚や野菜を売っている小さなお店が少しの間かくでありました。売られている生の魚は、冷ぞうされているわけではなく、土ぼこりや排気ガスにまみれていました。屋台もあったけど、ぼくは食べる気がしませんでした。そんな所を通りすぎて、ゲートに警備をする人がいて、セキュリティーチェックを受けて入ったホテルにはレストランが何軒も入っていました。朝食はビュッフェを食べました。ビュッフェは、洋食、中華、和食もあり、デザートまでおなかがはちきれるほど食べました。他のテーブルの食べ終わった人のお皿には食べきれなかった食べ物が山もり残っていました。それが食品ロスだと思います。

日本にも最近よくテレビで見る子ども食堂があるように、食べ物にこまっている子どももいるだろうけど、貧富の差がはげしいフィリピンのような国では、ゲートの中と外に、「飢餓」と「飽食」があるんだと思いました。

ぼくはこの本を読んで、まずぼくに出来ることは、毎日食べられることを当たり前だと思わずに、食べ物を残さずきれいに食べることだと思いました。ごはんを作ってくれたお母さんやお店の人に、また、野菜、お米、お肉や魚を作ってくれた農家の人やらく農の人、漁師さんにも感しゃしながら食べようと思います。

対象図書名　「いただきます」を考える

小学生の部・最優秀賞（小六）

殻を打ち破って

平塚　陽丸

どんなに無理だと思えることでも、やってみなければ分からない。諦めてしまったらその時点で終わりだ。知恵を働かせ自分の信じた道を突き進むケイティから、僕はたくさんの勇気をもらった。

今、僕もあることに挑戦している。それも自分には全く向いていないことだ。去年の冬、僕の学校では数年ぶりに「芦口博士」を復活させることになった。いろいろな行事を通して、わが校の歴史や伝統を伝える重要な役だ。僕達の学年が体育館に集められた。博士にふさわしい人物を選ぶ投票が始まる。選ばれるのは三人。誰になるのか、みんな興味津々だ。注目の結果発表。一人目、二人目と名前が発表され、大きな拍手が湧き起こる。なるほどと思える二人だった。成績も良く、どんな時も人前で堂々と話が出来、おまけにユーモアもある。いわゆる「みんなの人気者」といえる二人だった。僕は大いに納得しながら、エールの拍手を送っていた。そして三人目の名前が発表された。信じられないことに、何と僕の名前だった。自分の耳を疑った。目が点になった。これは何かの間違いではないか、そうであってくれと思ったが、前の二人と同様、僕にも大きな拍手があった。そんなバカな…。戸惑う僕におかまい無しで、事がどんどん進んでいったのだ。

他の二人は博士に選ばれて誇らしい気だった。やる気満々の二人とは対照的に、僕は途方に暮れるばかりだった。なぜ僕なのか分からない。勉強はまぁまぁ出来るけれど、面白いことの一つも言えない内気な僕だ。どう考えても、人気キャラクターの博士とは程遠い。こんな僕に果たしてこの任務が務まるのだろうか。気の小さいビビリの博士なんて聞いたことがない。僕はこれまで、みんなを笑わせたり、みんなを引っぱっていくような人をずっとうらやましく思っていた。確かに、そういうリーダーシップのある人間になりたいと思ってきた。変わるなら今だ。天から何かが降りてきて、僕はある日気持ちを切り替えた。

僕らしい博士でいく！博士お披露目に向けて、せりふと動きを考える。おじいさん博士になりきろうと、カツラに眼鏡、白衣姿で腰を曲げ、僕は大胆なツッコミを入れる。毎日毎日練習をする。寝ても覚めても僕の頭の中は博士のことでいっぱいだった。自分でも信じられない位、僕は老博士になりきっていったのだ。そうして迎えた初のお披露目は、生徒にも先生達にも大好評だった。

おとなしいだけが取り柄の僕が、自分の殻を打ち破ることができた。人は何かのきっかけで自分を変えることができる。与えられたチャンスをモノに出来るかどうかは、やはり自分次第だと思う。ケイティは自分の夢は叶わなかったけれど、彼女の挑戦にはとてつもなく大きな意味があったのだと思える。

僕の挑戦もまだ始まったばかりだ。

対象図書名　その魔球に、まだ名はない

中学生の部・大賞

幸せ

蛭子　愛（中二）

私の兄は、二分脊椎という病気で生まれました。二分脊椎とは、本来、背骨の中にあるべき脊椎が骨の外にあるために、さまざまな症状や神経障害がおこる病気です。

また、二分脊椎には、二つのタイプがあります。一つは脊椎の異常が表面から見えるもので、顕在性二分脊椎といいます。もう一つは、脊椎の異常が表面からは見えないもので、潜在性二分脊椎といいます。

兄は、表面からは見えない潜在性二分脊椎でした。潜在性二分脊椎は、生後すぐにはあまり症状が見られないため、早期発見が難しいそうです。そして、成長するにつれて、排便障害や神経障害などの症状が出てくることがあります。二歳を過ぎても、歩けない、話せないということで、気が付く場合もあるそうです。また、症状が出てからでは、手術をしても症状をなくすことは難しいそうです。

しかし、兄の場合は奇跡的に生後すぐに発見することができ、生後二か月で手術を受け、心配されていた感染症も回避することができました。術後、言語障害が残るかもしれないと言われていて、一歳半まで言語の検査にも通ったそうですが、通常よりもきちんと話せているとのことで、母は医師から「もう検査には来なくていいですよ。本当によかったですね、お母さん。」と言われ、ほっとしたと、母から聞きました。兄は今、障がいを持つことなく、健康に暮らしています。

この本を読んで思ったのは、もし兄に、歩けなかったり、話せなかったりといった障がいが残っていたら、私は、あみちゃんのお姉ちゃんのように、障がい者の妹として、いろいろなことを我慢しなければならなかったのかな、ということでした。

あみちゃんのお姉ちゃんは、いつもあみちゃんのために、頑張ったり我慢したりしていました。小さいころは、好奇の目で見られるあみちゃんを他人の視線から守り、大きくなってからは、あみちゃんが私立高校に行くため、お姉ちゃんは自分の行きたかった学校には進学できませんでした。

私は、思いました。もし兄の病気が早期発見されず、兄が障がい者になっていたとしたら。きっと、周りの人は、必然的に私よりも兄の方を優先していただろうと。そして、私は、常に障がい者の兄妹としてつらい思いをしたり、我慢したりして生きていたのだろうと。

私は、出かけたときなどに障がいを持っている人を見ると、かわいそうだな、自分や自分の家族が障がいを持っていなくてよかったなと、無意識に思ってしまっていました。しかし、この本を読んで、そう思うことは間違っていたとわかりました。

なぜなら、あみちゃんも、あみちゃんの家族も、かわいそうな、不幸な人たちではないとわかったからです。あみちゃんとその家族は、むしろ、幸せな人たちでした。

あみちゃんは自分の障がいのおかげで、周りの人の温かさを知り、感謝の心を持つことができました。誰よりも努力し、努力が結果に結びつく喜びも、人一倍知っています。あみちゃんは幸せな人でした。

あみちゃんの家族は、あみちゃんの頑張りを側で見たり、あみちゃん

を助けたりすることで、自分もより一層頑張れたり、あみちゃんの喜びを自分のこととして喜べたりしていました。あみちゃんの家族も、かわいそうな人たちではありませんでした。

幸せなのか、不幸なのか。かわいそうなのか、そうではないのか。それを決めるのは、置かれた状況やその状態ではないのだと思います。それは、いつも、人の心が決めるのだと思います。

私は今、よく兄に助けてもらっています。勉強を教えてもらったり、学校や塾のことで相談に乗ってもらったり。兄は厳しい人ですが、兄のアドバイスはいつも的確で、私のことをよく分かった上で、私のために厳しく言ってくれているのが分かるので、困ったときには兄に相談することが多いです。

そんな兄が障がい者で、何のアドバイスもくれない、むしろ私が助けなければならない兄だったら、いない方がよかったのかな、と考えてみました。私の答えは、ノーです。もしそうだとしても、兄には私の兄でいてほしいです。

存在しない方がいい人なんて、いないのではないでしょうか。きっと、私の兄なら、何かの障がいが残っていたとしても、頑張る姿を見せてくれただろうし、アドバイスではなくても、私にいろいろなことを教えてくれたでしょう。

自分も含めて、一人ひとり、みんな価値のある人間です。人と比べず、健康な身体で努力できることに感謝して、周りの人を大切にして、生きていきたいと思います。

対象図書名　あみちゃんの魔法のことば

中学生の部・最優秀賞（中一）

一人ひとりがもつ世界

大澤　仁

僕はこの本を読んでいるとき、ひいおばあちゃんを思い出しました。幼稚園の頃は、隣の町にあるひいおばあちゃんの家へ何度か行っていました。しかし、話の話題もなく、あいさつをして、家を出てしまう、そんな関係でした。年をとるにつれて、ますます話す回数も減り、話してもすぐ忘れられると思っていました。僕は、その時、ひいおばあちゃんを、あの家に住んでいる人というくらいで考えていました。いつも思っていたのは、ひいおばあちゃんは、ひいおじいちゃんとの二人暮らしだから、全然悲しくなくて元気に生きているのだろう、という事でした。

しかし、僕はひいおばあちゃんに対する考え方が変わってきたのです。それは、小学校六年生の夏休み明けのころです。僕は、いつものように布団の中へ入りました。すると、たまに考えてしまうことを、より深く考え過ぎてしまいました。それは、「死」についてです。僕は、「死んだらどうなるの」「今、考える事ができているのは何故」と、「死」についての恐怖で頭がいっぱいになりました。次の日から、頭の中ではそのくり返し、思うように体が動きませんでした。そのようなことを考えていると、ひいおばあちゃんの事を思い出しました。ひいおばあちゃんの限りある人生の中で、あんな対応をしてしまったのだな、と。僕とひいおばあちゃんの間にも、ジャックとおじいちゃんのような共通の話題があればよかったのにな、と何度思ったことか。しかし、つくらなかったのは僕でした。ひいおばあちゃんの世界へ入ることができなかったのか、と今更ながら思います。

後悔しても、もう遅かったのです。今年の二月にひいおばあちゃんは亡くなりました。

お葬式の日には、歯を食いしばっても耐えきれないほど悔しくて泣きました。この時初めてひいおばあちゃんの生きていたことについて、今まで以上に考えました。ひいおばあちゃんは亡くなる少し前に僕と会いました。「この子は誰」と言いました。僕は、何故と思いましたが、すぐに説明しました。帰り際に、笑顔で手を振るまでもしてくれました。いつもは、寝たきりで口数の少ないひいおばあちゃんでしたが、このときは、僕が、ひいおばあちゃんの世界へ入ることができたのか、ひいおばあちゃんは、嬉しそうでした。

ひいおばあちゃんは、最期まで、ひいおばあちゃんに寄りそうことのできなかった僕に対しても怒ることなく懸命に生きていました。

では、何故ジャックは、あんなにも長い間おじいちゃんの世界へ入り続けることができたのでしょうか。僕は、ジャックがおじいちゃんと一緒にいることが面白いと思ったからだと思います。僕は、ひいおばあちゃんと一緒にいることは面白くないことだと、本当のことも知らずに決めつけていました。

他人の世界から離れて、自分だけの世界で生きることは簡単です。他人に合わせることなく、自由に生きることができます。しかし、半年前の僕のように、誰かをずっと悲しませ続けているかもしれません。誰かの世界へ入り、気持ちに寄りそうことは、難しく、誰にとっても苦痛であるはずです。しかし、誰かの世界へ入る事は、自分の成長を妨げている訳ではないと思います。むしろ、成長しているのだと僕は思います。ジャックも色々な事を知り、成長し、大冒険をすることができています。

だから、自分だけの世界で、成長していくことは不可能だと思いま

す。どの業界にも、トップがいます。認められなければ、進むことはできません。誰かに寄りそうことで、自分の人生を、そして相手の人生をより良くしているのだと思います。誰かの世界へ入ることは、恥でも何でもありません。

ジャックは、おじいちゃんが認知症で、四十年も前と同じ行動をするおじいちゃんと共に、数日生活しました。

ジャックは、おじいちゃんの世界へ入ることによって、老人ホームの実体を知り、二人でその不正を世間に公表することができました。誰かが独りで悲しんでいれば、その「一人ひとりがもつ世界」へ入り、その人と自分の成長へつなげていきます。自分だけの世界で生きるよりも、誰かと共に生きる方が人として成長できる、そういった考えを起こしてくれました。そのように考え、行動していれば、いつかきっと自分の世界へ誰かが入り、長い間寄りそってくれるのではないかと思いました。僕も共に生きられる誰かをこれからさがし、その人に寄りそいたいと思います。

一人では経験できないこと、解決できないことも、誰かと一緒ならできるのだと思います。命が絶える日はいつか訪れますが、ジャックとおじいちゃんのように、最期まで、寄りそい寄りそわれながら生きていきたいです。

対象図書名　おじいちゃんの大脱走

中学生の部・最優秀賞（中二）

「幸せ」とは

竹田　彩音

「どんなにつらくても、お母さんがいないからなんて、絶対言う。」これは、先日、父に言われた言葉だ。私は五才の頃に母を亡くし、父子家庭で育った。母を亡くし、今年で八年。少ししか、母のことを覚えていない。けれども、私の中では、母の姿を思い浮かべると、いつも、にこにこ笑って「彩ちゃん」と呼んでくれる。また、母のことを思い出すと安心したり、悲しくなったりする。

私は、家族以外の人に会う時、いつも気をつけていることがある。それは、いつも笑顔で、楽しそうにすることだ。母と一緒にいた時のように、一緒にいてくれる人、話している人が安心したり、楽しい気持ちになったりすると思うからだ。

私は中学生になって、自分と相手を比べて見てしまうことが多くなった。そして、相手と違う部分を見つけると、「やっぱり、父子家庭だから。」と母のせいのようにしてしまっていた。入学式も卒業式も、授業参観も、祖母や父が来てくれた。私は、母に来て欲しかったと、ずっと思っていた。

「幸せな生活」とは、どんな生活なのだろうか。私は、両親がいて、普通に食事ができて、好きな服を着られて、いつも笑っていられることだと思っていた。だから、私は、今の生活が「幸せな生活」とは思えなかった。

そんな私に、父は、「お前には、お母さんがどんな気持ちで亡くなったか、分からないだろうな。」と言った。私は、最初、なぜ父がこんな

ことを言うのか理解できなかった。すると父は、「死にたくない、死にたくない。」と言いながら、母が亡くなったことを教えてくれた。その時、私は、自分のことしか、考えていなかったことに、気づき、母のせいにしてしまったことが恥ずかしく、悔しかった。

母は、私や、兄弟の成長を見届けたいという思いを、父に託し、いつも、どこかで見守ってくれている。そして私は、その気持ちに応えて、精一杯、前を向いて生きていかなければならない。

この本の、主人公も、父親がいないから満足な生活を送れないと思っていた。そして私も、母のせいにしてしまっていた。しかし、それは違うことに気づくことができた。「幸せ」は、誰かと比べることはできない。自分が一瞬でも、心があたたかくなったり、うれしいと思うことがあったら、それは「幸せ」に違いないと私は思った。

私には、母はいないが、母の代わりをしてくれる祖母がいる。母が亡くなり、祖父母の家に行ってから、幼い私や、働いてくれている父の、食事づくりや、洗濯など、家事を全てしてくれている。今でも、勉強を教えてくれたり、行事に来てくれたり、部活のお弁当づくりをしてくれる。

祖母の口ぐせは、「あの子の家は、母親がいないから、なんて言われないように」だ。私たちが悲しい思いをしないように、二回目の子育てを祖母はこなしている。もし、祖母がいなかったら、私は、今のように、学校に行ったら、友達がいて、家に帰っても、一人のことはなく、いつも祖父母がいてくれる、そんな生活はなかっただろう。

私には家族がいて、友達がいる。幼い頃から、いろいろな人に親切にしてもらい、母親代わりを一生懸命にしてくれる祖母もいる。こんなに恵まれている環境で生きていることは、とても素晴らしいことで、有難いことだ。こんなに良い環境で育ててもらえている自分に気づかなかった自分が恥ずかしいと思った。

家族と一緒に過ごし、いろいろな服を着られ、友達がいて、いとこもいる。こんな、あたり前のように思えていた生活や環境が、こんなに幸せだったことに気づき、日々感謝しながら生きていこうと思った。

私が大人になったとき、母の気持ちも、父の気持ちも分かる様になると思う。一生懸命、勉強や、礼儀作法まで教えてくれる厳しい祖母や、可愛がってくれる祖父の気持ちに気付くことができると思う。そして、気付き、分かるようになった時、私は、家族に、心から感謝することができるだろう。

今、父子家庭や母子家庭の世帯が増えているそうだ。また、母子家庭や父子家庭に対する手当ても増えている。その手当を、活用していくことも必要だと思う。

今の私には、さみしさを乗り越える勇気をくれる家族がいる。いつも、どこかで見守り続けてくれる優しい母もいる。家族と過ごす時間を大切に前へ向かって進んでいきたい。

対象図書名　八月のひかり

中学生の部・最優秀賞（中三）

私の妹

難波　春

私には妹と弟がいる。私達は写真を見返すことが好きで、よく三人で暇な時間を使い、アルバムを開いて、思い出に浸りながら過ごす。保育園や小学生の時の写真を見て笑ったり、懐かしんだりしてとても楽しい。しかし、ある一枚の写真が目に止まると、楽しい空気が一瞬冷めてしまう。その写真には小さな赤ちゃんが透明のケースの中で寝ている姿が写っているのだ。私はそれを初めて見た時とても驚いた。また、同時に色々な疑問が浮かび、興味が湧いてきた。そして、衝動的に両親にこの写真について尋ねた。

最初に、「この子誰？」と質問してみた。すると、母がクスッと笑って、「その子はあなたの妹だよ。」と言った。「えー！」今度は目が飛び出るくらい驚いた。あんなに元気な妹がこんなに小さかったのだと考えると頭が混乱し、爆発しそうになった。私は動揺が隠しきれず、次の質問をしようとした時、母が先に口を開いた。「じゃあ、妹が生まれてきた時のこと最初から話してあげる。」私はそれを聞いて、頭を上下に大きく振った。映画を見始めるかのようにわくわくした。

妹は五月に生まれる予定だったが、予定より早く二月に生まれた。あまりにも早かったせいで緊急帝王切開手術という選択になった。大きな産声を上げた妹は極低出生体重児だったため、菌への抵抗力が弱かった。だから、保育器の中に六ヶ月もの間入っておく必要があった。その姿はまるで子犬が寝ているかのようで、父の両手にすっぽり収まる程、とても小さな体だった。また、写真を見てもはっきりと分かるのだが、妹の目は焦点が合っていなかった。その姿を見て両親は妹の将来がどうなってしまうのかと心配になったという。しかし、妹が笑っているのを見ていると、不安で冷えた体がほんのり温かくなったように感じたのだと、微笑みながら教えてくれた。「この子は人を幸せにする大きな力がある。」心配ばかりせず、妹の歩幅で道を作っていこうとその時、両親は決心した。その後、体重が安定し、目の手術も成功したので、退院できるようになった。

数年後、妹は保育園に入学した。妹は周りの子よりも一段と小さかった。ズボンを履くと脚が半分も出ていなかったし、服が大きすぎてダボダボだった。小さい体だったが、保育園の生活で困ることは起きなかった。楽しい時間を過ごしてあっという間に卒園式になった。その卒園式では、大きな声で歌っていたかと思うと突然、妹の目から大粒の涙が溢れ出た。思いがけない出来事だった。父もおもわず、つられて目を赤くしていた。明るく元気に通っていた妹だが、皆についていけず、つらかった事や、頑張った事があったのかもしれない。

そして、小学生。入学してから小学四年生になるまで、適性検査を行うために何度か病院に通っていた。だから両親の心配は、生まれてからずっと続いていた。本当に障害になったりしていないか、目はちゃんと機能しているのか専門医の先生やリハビリの技師の方のお力添えを要した。幸いにも妹の体には異常が無く、今も元気に成長していっている。

この話を聞く事で、妹に尊敬を抱いた。手のひらに収まる大きさの体が私よりも大きくなるまでの間、たくさん努力していた。本当に妹のハートは強い。この本のあみちゃんみたいだ。

あみちゃんは手脚がほとんど無いのに、片足だけで食事やメイクなど何なくこなしている。難しい事でも、あきらめず懸命に努力をし、でき

ることを少しずつ身につけていった。強い心を持っているからこそできることだ。私にはとても真似できない。私は心が弱くて、怒られたらすぐ泣いてしまう。強くなろうと思うが、なかなかなれない。そのことで悩んだりすることが何度もある。でも、そんな時「頑張れ、頑張れ。」と笑顔で応援してくれる人がいる。妹だ。いつもそばにいてくれて、励まし、助けてくれる私の笑顔の救世主だ。

あみちゃんの魔法のことばで「生まれてこなくていい命はひとつもないのです」という一文がある。両親は妹をとても心配したが、その二倍も三倍も彼女から喜びをもらったと思う。私も妹がいなかったら、今の自分はいないと思う。だから、妹がいることに感謝しかない。私はあみちゃんも妹もハートが強いと言った。しかし、それは、彼女達が人を支え、支えられ、必死に努力した結果、得られたものだと思う。私も自分の弱さを強さに変え、困った人がいたら手を差しのべられる優しい人になりたいと思う。彼女に伝えたい言葉がある。

「生まれてきてくれてありがとう。」

対象図書名　あみちゃんの魔法のことば

第30回（令和2年度）全国読書作文コンクール

優 秀 作 品 集

令和2年10月　発行

発　行　公益社団法人 全国学習塾協会
〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-39-2
TEL 03-6915-2293 FAX 03-6915-2294
E-mail info@jja.or.jp